■展覧会カタログ評■

「横須賀功光の写真魔術『光と鬼』」展

佐々木 悠 介

「横須賀功光の写真魔術『光と鬼』」展（東京都写真美術館、二〇〇五年、十一月十九日～十二月十八日）は、一般には広告写真、ファッション写真で知られた写真家横須賀功光（のりあき）（一九三七～二〇〇三）の全貌を明らかにしようという試みであり、またそのカタログ（PARCO出版）は、今回展示されなかった作品も含めて、膨大な数の横須賀作品を収録したものである。

横須賀は、多くの作品のネガ、ポジ、プリントに自ら鋏を入れて死んだのだという。残した映像が、自分の死後に解読され、意味を与えられるということを、彼自身は或いは拒んだのかも知れない。今回の回顧展は、そんな横須賀の映像の読みの可能性を、そのまま観る者の手に委ねた。会場に設置されたパネルは、ドミノ倒しの駒のようにX字に交差するように並べられ、さらにその周辺に一重二重のパネルの列が作られていた。一つ一つのパネルは両面に作品が貼られており、ある列を手前から順に見ていくと、一つの連続性のあるシリーズ写真を追うことができ、逆側から見ていくと、そこにはまた別のシリーズ写真がある、という仕掛けになっている。全体の証明を暗く落とされた正方形の部屋の中で、そうして重なり合ったパネルの、たとえば実験的な光の模様（「時間の庭」）や、肉体を究極に物質化したシリーズ（「檻」）を観ていくうち、いつしかその迷路の中で道に迷い、本来は別のシリーズであるはずのパネルの間を横断し、立ち止まり、あたりを見渡している自分に気づく。床はこの展示のために特設されたものだが、観客たちの、パネルの間を歩き回る重い革靴の音、コツコツというハイヒールの音を響かせ、道に迷った観者は、まるで自分が都会の雑踏の中で取り残されたかのような気分を味わうのである。こうして横須賀の映像は、シリーズ写真の展示にあるはずの固定したあらすじを持たない、開かれたテクストとして提示されている。

カタログ＝冊子という媒体においては、こうした錯綜はもちろん表現され得ない。シリーズごとに並べられた作品の頁をめくりながら、我々は決して道に迷うことのない安全地帯にいて、横須賀の作品を手にしている。そうして見る女性の肉体（「ＢＯＤＹ」という章）は、写真家のあまりにもフェティッシュな、そして青い視線が刻み込まれ、時折使われている男性の肉体は、女性の肉体とは全く異質のものとして見えてしまう。それは結局読者自身の投影なのだろうか。たしかにあの展示の際には、女性の肉体も男性の肉体も、曲線の集まり、凹凸の組み合わせでしかなかったのだ。

とは言えこのカタログは、横須賀功光という写真家が今後再び、三度（みたび）考えられるために残される貴重な記録となった。収録作品リストには十分なデータがある。論文と言えるものはなく、写真家と関わりのあった多くの人たちの文章が載せられ、唯一ある程度の長さがあるのは、監修者松岡正剛の想い出話を交えたエッセイだが、これは横須賀という写真家が、ようやくその全貌を提示されたところだという状況を物語っている。今後、写真論という場の中で、もちろん日本という枠を超えて横須賀を語っていくのは、我々に残された仕事であろう。